様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月　 ４ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2019
課題番号：１７Ｋ１３４２２

研究課題名（和文）古代ローマにおける文芸論の形成とその受容

研究課題名（英文）Formation and Reception of Literary Theory in Ancient Rome

研究代表者
西井　奨（Nishii, Sho）

大阪大学・文学研究科・講師

研究者番号：２０７２２７５５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：古代ローマの文芸論の形成と受容のありようを明らかにするにあたり、特にオウィディウス『変身物語』の構造の分析を中心に取り組み、研究会での2回の口頭発表を経て、2本の論文として発表することができた。そこでは、特にこれまで着目されていなかった『変身物語』第1巻と第15巻の関係性・および第15巻中のピュタゴラスの教説とそれを含む第15巻の全体の構造について、オウィディウスの原典テクストのみならず先行するギリシア・ラテン文学作品や関連する諸作品を綿密に検討することで、作品全体のより良い理解に寄与することになる重要な解釈を得ることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、古代ローマに形成された文芸論について、特にオウィディウスの作品を中心に検討するものであり、先行するギリシア・ラテン文学の諸要素の集大成的要素を有する作品である『変身物語』の構造を分析することで、その古代ローマの文芸論の一つの結実した形を明らかにするところに学術的な特色がある。これは、中世・ルネサンス期以降のヨーロッパにおける文芸活動において如何にして古代ローマの文芸活動が受容されていったのかを理解する上での大きな軸となる。この軸を通じて、古代から中世・ルネサンス期を経て現代に至るヨーロッパ文学の精神の普遍的な特質について解明する手がかりとなるものである。

研究成果の概要（英文）：I researched mainly the strcuture of Ovid’s Metamorphoses in order to clarify how the literary theory in ancient Rome was formed and received. At last, I have accomplished two papers about the structure of Ovid’s Metamorphoses. Through the researches, I have got an important interpretation which contributes the better understanding of the whole of this work.

研究分野：西洋古典学

キーワード：西洋古典学　ラテン文学　オウィディウス

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

古代ローマにおける文芸活動は、古代ギリシアの文化を取り込み変容させ、知的伝統として中世・ルネサンス期以降のヨーロッパに受け継がれていくにあたり極めて重要な役割を果たしている。なかでも、ウェルギリウス・ホラティウス・オウィディウスといったラテン文学黄金期の詩人たちによる、ギリシア・ローマ神話を題材とした作品は、ヨーロッパ人にとっての古典として一つの精神的支柱をなしている。それゆえこれらの詩人の作品研究は国内外で進められてきているが、その中心的な研究方法は、ラテン文学に先行するギリシア文学との比較研究となっている。この研究方法は確かにラテン文学の独創性への理解に一定の寄与をなすものであるが、その創作原理をなすところの内的特質を見落としがちであるという欠点があった。この創作原理の一端をなすものが、弁論術である。古代ローマの詩人たちは、年少の頃から成年に至るまで、弁論術に関する教育をギリシア以上に熱心に受けてきており、その成果は、作品の微細な表現からマクロな構成にまで申し分なく反映されている。申請者はこれまで、この弁論術を詩人の創作原理として着目する形で、ラテン文学黄金期の詩人たちのうち特にオウィディウスの作品の研究に取り組んできている。平成 22 年度から平成 23 年度にかけては、科学研究費補助金特別研究員奨励費の交付を受け、「オウィディウスにおけるギリシア神話の受容と変容」という研究課題のもとで、オウィディウスが『名高き女たちの手紙』や『変身物語』といったギリシア・ローマ神話を題材とした作品において、弁論術をいかにして作品の表現や構成にまで活用しているかということを明らかにしてきた。本研究では、このような観点からの研究手法を、特に詩人の作中における文芸論に該当する内容の箇所について適用すること背景としていた。

２．研究の目的

古代ローマの文芸論がどのように形成され受容されているかということを、オウィディウスの作品研究を通じて明らかにする。

３．研究の方法

オウィディウスの作品のラテン語原典テクストに基づく綿密な読解を軸としながら、オウィディウスに先行する諸作品および文芸論を理解する上で手助けとなる現代の諸文献についても幅広くあたり、調査を進める。

４．研究成果

2017 年度は、ホラティウス『詩論』研究と並行して、特にオウィディウス『名高き女たちの手紙』および『変身物語』の研究を進めた。研究にあたっては、併せてアリストテレス『詩学』とカッリマコス『賛歌』についても原典からの調査を進め、オウィディウスの創作の特質を明らかにするよう努めた。オウィディウスが特に好んで描いているのではないかと考えられる物語のモチーフ・構成について、『名高き女たちの手紙』および『変身物語』に共通する形で一定の知見を得ることができた。これらの研究作業を踏まえて、名古屋大学西洋古典研究会例会（2017 年 12 月 16 日）にて「*Heroides* から *Metamorphoses* へ —オウィディウス『変身物語』第 2 巻 676-835 の物語構造」と題する口頭発表をし、また、京都大学西洋古典研究会例会（2017 年 12 月 24 日）にて「オウィディウス『変身物語』2. 676-832 における懲罰の構造」と題する口頭発表をした。これらの発表において、オウィディウス『変身物語』におけるバットスの物語とアグラウロスの物語は、もともとの伝承としては、ただメルクリウスに対する欺き・不敬への罰として石化の罰がなされたのであり、バットスやアグラウロスの言葉そのものに、「後に自分の石化をもたらすような要素」はなかったと考えられる。そこでオウィディウスはこれらの物語に新たに、「自身が発した言葉が仇となって災いが自身に降りかかってくる」という要素を加え、「石化の罰を受けるきっかけが罰を受ける本人の言葉そのものにある」ようにした。これは物語に必然性を与える追加要素である、ということを示した。また古代弁論術研究の点から重要な研究書を読み進め「書評：吉田俊一郎『ワレリウス・マクシムス『著名言行録』の修辞学的側面の研究』東海大学出版部、2017」を日本西洋古典学会編『西洋古典学研究』第 48 号で発表した。

2018 年度は、オウィディウス『変身物語』が古代ローマの文芸論において重要な位置を占めるものとして、この作品の研究を主に進めた。特に詩人が『変身物語』創作に際し意識していたであろう事柄について、叙事詩の伝統といった文学ジャンルの側面からだけでなく、環境や自然や動物に関する表象からも分析を試みた。この際、ヘーシオドス『仕事と日』やウェルギリウス『牧歌』『農耕詩』の影響も重要であると考え、これらの作品の精読にも努めた。またギリシアから連なる魂の輪廻転生思想も『変身物語』の解釈には重要なものであることから、関連する哲学・思想関連の古代ギリシア語文献も渉猟し、その理解にも努め、古代ローマの文芸論を多角的に把握するような形で研究を進めた。特に『変身物語』第 15 巻における、ローマ第 2 代の王ヌマがピュータゴラースの教説を学ぶという際にかなり長く描写されるピュータゴラースの言葉に『変身物語』全体のより良い解釈に繋がるものがあるとして、それと『変身物語』中の個々の物語の描写との対応性の点からも分析を進めた。またこれと関連する形で、ラテン文学全般におけるオルペウスの表象についても文芸論の重要な位置付けとして調査を進めた。また古代ローマの文芸論及び文学作品を、現代の文学理論・批評理論の視点から考察し、その中でも、特にエ

コクリティシズムの視点を取り入れて作品の研究を進めることができないかと検討した。

2019 年度も、古代ローマの文芸論において重要な位置づけを占めるものとして、オウィディウス『変身物語』の研究を進めた。『変身物語』の第 1 巻と最終巻の第 15 巻は教訓叙事詩の要素を有しているという点に着目し、それぞれの巻においても時代説話について言及されているところから、その両巻の内容を踏まえることで、第 1 巻の時代説話に続くリュカオンの物語がどのような連続性に基づいて描かれているのかを明らかにした。これについては、「オウィディウス『変身物語』の時代説話とリュカオンの食卓」として論文にまとめ、『神話学研究』第 2 号（2019 年 12 月）に発表した。 また『変身物語』第 15 巻のピュタゴラスの教説の位置付けについて、ピュタゴラスの教説とその後に続く第 15 巻の箇所全体から、『変身物語』中に複数見られる 「無に帰す長い忠告」の構造があることを指摘し、これまで見過ごされてきたピュタゴラスの教説の重要性について再評価した。これについては、「無に帰す長い忠告 ――オウィディウス『変身物語』第 15 巻におけるピュタゴラスの教説の位置付け」として論文にまとめ、『フィロカリア』第 37 号（2020 年 3 月）に発表 した。また、オウィディウスの作品研究に際し新しい研究であるところの B. W. Boyd (ed.), *Ovid's Homer: Authority, Repetition, Reception*, Oxford 2017 について書評 を執筆し、研究動向の紹介に努めた。これについては『西洋古典学研究』第 68 号（2020 年 3 月）に発表した。以上のようにオウィディウス『変身物語』の研究を中心とした分析を通じて、古代ローマの文芸論の形成についても考究を深めた。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 西井　奨	４．巻 48
２．論文標題 書評：吉田俊一郎『ワレリウス・マクシムス『著名言行録』の修辞学的側面の研究』東海大学出版部、2017	５．発行年 2018年
３．雑誌名 西洋古典学研究	６．最初と最後の頁 101-103
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西井　奨	４．巻 2
２．論文標題 オウィディウス『変身物語』の時代説話とリュカオンの食卓	５．発行年 2019年
３．雑誌名 神話学研究	６．最初と最後の頁 38-47
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） info:doi/10.18910/75533	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西井　奨	４．巻 37
２．論文標題 無に帰す長い忠告 ――オウィディウス『変身物語』第15巻におけるピュタゴラスの教説の位置付け	５．発行年 2020年
３．雑誌名 フィロカリア	６．最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 西井　奨	４．巻 68
２．論文標題 書評：B. W. Boyd (ed.), Ovid's Homer: Authority, Repetition, Reception, Oxford 2017	５．発行年 2020年
３．雑誌名 西洋古典学研究	６．最初と最後の頁 128-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 西井　奨
２．発表標題 HeroidesからMetamorphosesへ ―オウィディウス『変身物語』第2巻676-835の物語構造
３．学会等名 名古屋大学西洋古典研究会例会
４．発表年 2017年

１．発表者名 西井　奨
２．発表標題 オウィディウス『変身物語』2．676-832における懲罰の構造
３．学会等名 京都大学西洋古典研究会例会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

西井奨「大学で教えるということ」『以文』(60)，35 - 36，2017年11月．

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考